SARANIP　No. 5

市立函館博物館館報　1972. 9. 1

箱館焼雑考 (1)

市立函館博物館学芸係長　姫　野　英　夫

昭和46年6月、岐阜県瑞浪市釜戸町で安政年間、箱館に来て陶磁器製作に従事した美濃国岩村の陶工岩次が明治22年12月16日、72歳で死亡するまで作陶に従事した窯跡が、瑞浪市文化財調査団によって発掘され、窯跡の周辺約200平方メートルの斜面から4,000点にのぼる磁器片が発掘された。それに続いて次に紹介する笠松文書が問題となって来た。この文書に対する批判は次回にゆずり、今回はその全文を紹介する。

安政六年末正月二十八日

箱館交易一件　松平誠之助領分岩村岩次為次ヨリ初発目論見之次第木屋伝右衛門ヨリ聞取書上壱通笠松御役所ニオイテ写文○○

松平誠之助領分
濃州恵那郡岩村
岩次
為次

右両人是迄之手続承リ弓候始末奉申上候。初発去々巳年（安政4年）四月中、江戸本所水戸様御産物会所ニ罷在候処、御徒目附新見角蔵様ヨリ箱館御組頭河津三郎太郎様ニ御噺ニ相成リ右両者様ヨリ私共御召出之上被仰渡候者、今般箱館表ニ於テ瀬戸焼思召モ在之ニ付其方共箱館表ニ罷下リ土石場所見立之上心見之タメ焼立可任旨被仰渡候得共、新規窯元之儀者多分損毛モ相立候儀故御断申上候処、被仰付候者初発ヨリ益ニ相成候儀ハ何商売ニテモ無之次第、御上様ニモ御承知奉為遊候儀ニ付是非箱館表ニ下リ取懸リ候様被仰渡、私共身元ノ儀、地頭松平誠之助留守居今井堀右衛門儀箱館御奉行所ニ被召出、身元御請合ニ相成夫ヨリ御添翰頂載イタシ九月中箱館表ニ罷出候処、真様箱館近在土石場所見分被仰付所々相尋候処、陶器ニ相用候土石見当リ候ニ付、右土石国元ニ持参手窯ニテ心見焼立仕候処、至極宜敷品出来地頭ニ御目ニ掛ケ、翌午年(安政5年)ニ至リ四月中職人共召連箱館表ニ罷下リ国元手窯ニテ取拵候陶器御掛リ様ニ差上候処見事成品ニテ御一統様御悦ヒ奉為遊、別地面拝借被仰付、普請ニ取懸リ都合家数十壱軒出来相成、右表ニテ窯築立心見焼仕候処、尚又宜敷品出来御掛リ様方ヨリ見事成品出来候上ハ国元ニ立帰リ来未年（安政6年）ニ至リ職人共多分召連参リ精々焼立相励ミ候様被仰渡、旦亦是迄之入金モ多分相懸リ候間此上職人共召抱候テハ金子多分無之候テハ難出来、自力ニテハ行届兼候間何卒御拝借仕度旨願出候処、金弐千両手当金トシテ御貸渡相成候始末、此度職人共召連箱館表ニ罷下リ候次第ニ御座候、尤右箱館表之儀ハ至テ寒国ニテ冬気ニ相成三、四ケ月之内凌方無之、遠路年々往返仕候テハ諸雑費不少難渋ニ付、焼付渡世相務候ニ付右御返翰頂載イタシ江戸表ニ罷リ下リ、箱館奉行所ニ御届ケ奉申上此上江戸御奉所ヨリ御添翰頂載之上、北国筋ニ罷リ下リ職人共召連罷出候趣申聞候間此段奉申上候

長崎表ヨリご儀買取ノ儀御聞済ニ相成、国元産物諸品積廻シ箱館表産物会所ニ御取上之上売捌相成候儀ニテ決テ自分勝手ニ売捌候儀難出来儀ニ御座候趣是亦申聞候間此段奉申上候

宿
木屋
傳右衛門

下ゲ札之分

毎年十一月ヨリ翌二月迄　当世凌方之タメ当国ニオイテ無地之焼物相拵　箱館表ニオイテ四ケ月之間、職分ニ絵焼付凌方可仕儀ニ御座候

以上が笠松文書の全文で瑞浪市文化財調査団の一員で多治見市の岐阜県陶磁器連列場の古川庄作氏の好意でコピーで送られた文書である。この文書に対する充分な評価は現在瑞浪文化財調査団の人々の研究にまつところ大であるが、その結果如何によって、従来美濃より陶土を持って来て、湯の川の陶土と混合して箱館焼を焼いたという定説が否定される結果となるかもしれない。

（ひめの　ひでお）

研究と資料

田原家文書について

昭和46年度「箱館戦争資料調査、収集」を行ない、一応の成果をおさめることができた。

中でも田原家の文書は、松前藩政時代及び明治初年に至るまでの数代にわたっての貴重な資料である。

田原家文書資料の内訳は、俸禄、給与、取立関係を主とした松前藩士資料54点をはじめとして同家関係書簡、書附、日記、覚等の藩政時代の資料と、明治に入ってから田原音八の子息駒吉の松前松城学校卒業証書、開拓使「種痘済証」「地券」等に大別されるもので、総点数100余点を数えるものである、

特に、田原藤右衛門、唯蔵、音八等代々にわたる藩士資料54点は、同家資料の半数を占めているが、これだけ数代にわたって資料が発見されることはめずらしく、松前藩の職制の変遷を知るうえには貴重な資料の一つといえる。同家の「明細書」によると。

初代藤右衛門は伜唯蔵とともに天明2年（1782）町足軽として取立てられたのをはじめとして、各代ごとに後組足軽、新組足軽、新組徒士、古組徒士と順次繰上げられているが、松前藩の職制の中にあっては、下層の家柄であった。

箱館戦争に参加して戦死した音八を例に上げて、松前藩における幕末下級藩士取立ての様子をみてみると、音八は天保2年（1831）足軽並に奉公したのをはじめとして同6年には「砲術熟練」をもって一代後組足軽（切米二人扶持　金六両）、弘化3年(1846)新組足軽(切米二人扶持　金八両）嘉永元年（1848）新組御徒士格、翌2年には新組御徒士(三人扶持　金拾両)慶応元年には「精勤」につき家格を永代内下代格にそれぞれ繰上げられている。この音八は箱館戦争の初戦明治元年及部の役において奮戦のあまり戦死しているが、箱館戦争平定後翌2年12月、松前藩管事局より「……一死報国候条忠勇之所茲深御追賞被遊仍永世御先手組格上席被仰付」られ、10人扶持を給している。死してようやく平侍の地位を得たことになるのである。

音八のように家格は低いが、「砲術」等の技術を持っている者、或いは「職務勉励」等によって稀に昇進した場合は、「役付太儀料」としてその役職に見合うようにその差額を下賜されるが、音八の場合をみると、年代不詳のものを除いて元治元年（1864）「太儀料金壱両、別段御手当金弐分」、慶応元年（1865）も同様に「太儀料金壱両、別段御手当金弐分」、同4年(1868）には「太儀料金弐分弐朱、銭弐百八拾三文、別段金壱分壱朱、銭百四拾弐文」を下賜されている。

前に述べた扶持米の増加状態と合わせてみれば下級藩士の昇進状態がほぼ理解されよう。「桜島≪厚沢部町の歩み≫」には正議隊クーデター以前の藩政主脳部中に田原藤右衛門なるものが「祐筆」の位置についていることが記されている。田原家は代々藤右衛門を襲名することになっており、時期的には音八の先代がこの藤右衛門に当たると思われるが、今度寄贈された資料中にはそれを裏付ける資料が得られなかった。

松前藩は安政2年（1855）には1,488人という多量の藩士を容するようになった。明治4年（1871）廃藩置県の際松前藩より政府に提出された記録によれば、1,679人。侍分のうち石高をもって明示されている者233人を除き、扶持米取732人下卒、一代限卒迄を含めると、大多数が田原音八のような中、下級藩士によって占められていたことがわかる。

松前藩の職制については、永田富智氏が「新しい道史」でその変遷と特色について述べられており、また同氏の紹介された資料「北門史綱」には嘉永2年以降の藩士の新規取立、昇進の様子が知られるが、今後さらに藩士資料の発掘を行なっていく必要がある。

下級藩士の新規取立、昇進等の動態を知ることは、大砲鋳造、台場の設置等の軍制改革とともに幕末松前藩体制の研究を深化していく上で重要な作業と言えよう。

なお、田原家の資料については、黒ラシャの筒袖羽織一着、陣羽織二着、火事装束、佩刀一振等の実物資料がすでに入っており幕末松前藩の一藩士の全容を知ることができ、博物館資料としては極めて資料価値の高いものとなった。今後、こうした体系だった資料を得ることは不可能に近いが、歴史資料散逸防止の上でも尽力していきたいものである。

（学芸員：柴田幸生）

市立函館博物館沿革史（その3）

＜開拓使東京出張所内仮博物場＞ (2)

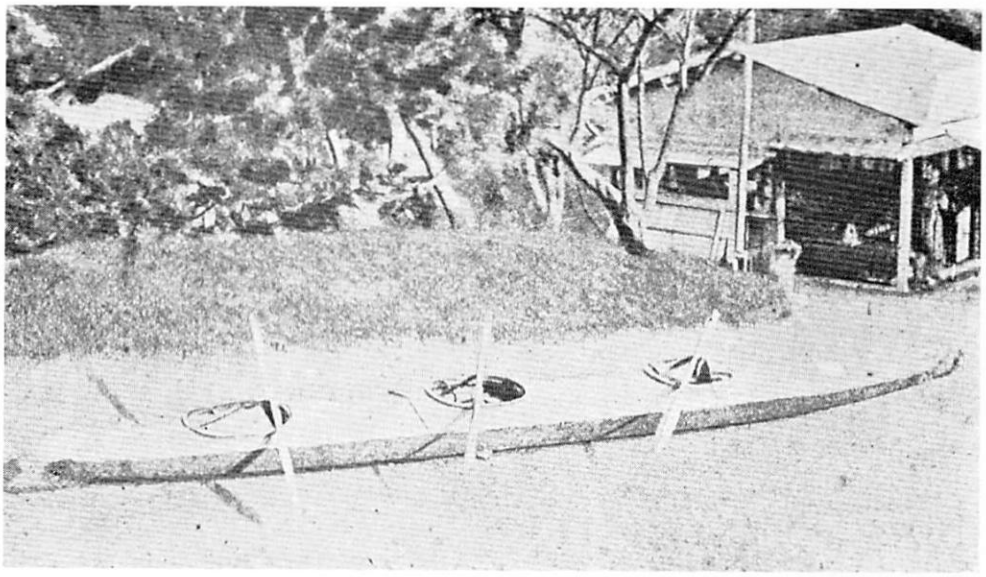
今回は明治8年カムチャッカのペトロパウルスク、千島の得撫(ウルップ)島に出張した黒田開拓使長官が仮博物場に陳列するため現地で採集した資料の入手過程について述べる。この過程は彼と同行した開拓使訳官八等出仕佐藤秀顕著千島紀行＜明治8年札幌開拓使発行、和本、36丁＞によって知る事が出来る。これによれば明治8年8月31日、黒田長官は開拓使の用船玄武丸に随行2人と共に横浜港出発、途中函館により、

＜9月15日＞

ペトロパウルスク着、時任理事官は12日軍艦日進で到着一行と会す。

＜9月18日＞

午前10時、日進は時任理事官と魯国の理事官「マチユニン」を乗せて「クリル」諸島に向け出発。同日長官の命を受け戸長の家に就て「ペトロパウルスク」産の獣皮並に



（図版説明）

明治15年、開拓使廃止の際東京仮博物場の民族関係資料は函館県に移管された。
写真は函館に運ばれた時のものと思われる。

魚類の見本及び土人の用ふる裘（カワゴロモ）、猟衣、革靴等を買求めたり。同日午後7時当港出帆。

＜9月19日＞

占守島を巡視せんとするも暴風雨のため為らず。

＜9月22日＞

午前9時、得撫島の村落ある処に着す。汽笛を鳴し其土民を呼びしに応ずる者なし。更に号砲を発し相待つこと大凡半時間、霧中に人声の聞ゆるあり、しばらくして数名の土民各々皮舟（海馬或は海象の皮を以て之を作り重に膃肭獣の用に供す）に乗り我船の近傍に集りければ、長官命じて其中の重立った者を本船に上げしめたり。酋長はペートルと云ふ者なり。仍ち土民一統へ酒一樽を与ふ。一同喜びて長官を導きて上陸し己の家に土民を集め共に酒樽を開けて長官の幸福を祝す。該島は「エドロフ」島と僅か3里の海峡をへだてたる一孤島にして、其人別は男17人、女11人（其後我理事官の調査によれば33人なり）戸数11戸にして、人種は皆「アリアッカ」たり。土人は土を5～6尺の深さに穿ち樹枝草葉を以て之を蔽ひ草を其内に敷きて穴居す。酋長ペートルの住居は2個の玻璃窓を設く。膃肭獣には小銃を用ふる事なく、海馬の皮と鯨骨を以て作りたる軽舟に座し、身には海象或いは海馬の膀胱を以て作りたる雨衣を、穿（ウガ）ち、頭には狐皮或は狼皮を以て獣の面を擬造したる冠を着け膃肭獣の群をして其猟夫たるを知らざらしめ巧に之を猟す。其猟舟は最も軽便にして5尺の童と雖も隻手（カタテ）を以て之を運搬すべく、然れども其之に乗り狂濤に駕するは泛々（ハンパン）として浪に随い其進む事最も快迅（カイジン）にして決して覆没（フクボツ）の患ひなし。其船に装置するものは楫（カイ）・抽水器・鋼叉・棒鈎等にて楫を用いて舟を膃肭獣の群に漕ぎ寄せ、若し水の舟に入る事あれば口を抽水器につけて吸出し、其群に近づけば鋼叉を以て之を衝き、其鋒獣（サキ）の肉中に入れば其鋒に附けたる鏃の如きもの忽ち柄と分れて其鏃のみ其肉中に止まり、其柄と鏃とは糸を以て予め之を繋ぎ置けり。故に膃肭獣は一刃の下に死せずして逃げる事あるも鋼叉の柄は浮標となりて膃肭獣の行く所に随ふが故水底に潜（シズ）むことを得ず終に棒を以て撲殺（ボクサツ）せられて鈎を以て懸げ揚げられるに至る。酋長の家に入りて諸事を検討して大凡1時間にして船に帰る。酋長等15～6人の男女共に長官を送り来て酒菓の饗応を受く。酋長に命じて物品の見本等買求むべき筈なりしが既に当人も乱酔前後を弁ぜず且出帆の時限も差迫れば終に逐て去らしむ。同日午後2時半得撫島を去る。

＜9月24日＞

午後0時半根室港に着し旧本陣に入る。

以上の記載で、黒田長官一行はペトロパウルスクで、カムチャッカ土民の資料購入は成功したが、得撫島ではアリウト族の資料は入手出来なかった。然し好運にもペトロパウルスクを同時に出港した時任理事官の一行を乗せた軍艦日進は強風のため得撫島に上陸出来ず根室港に入港、此処で黒田長官に再会した。9月29日玄武丸は再度時任理事官と露国理事官の一行を乗せ得撫島に向け出港した。現在函館博物館に伝わる、アリウト族の三人乗り皮船その他は時任理事官の一行が黒田長官の意を体して、採集したものと思われる。

（学芸係長：姫野英夫）

入館者統計

昭和46年度常設展示　(47.2.1～47.3.31)

月別	区分	本館 個人	本館 団体	本館 計	分館 個人	分館 団体	分館 計	郷土資料館 個人	郷土資料館 団体	郷土資料館 計	総計
2	大人	130	35	165	428	55	483	71	10	81	729
	小人	138		138	125		125	8		8	271
	計	268	35	303	553	55	608	79	10	89	1,000
3	大人	699		692	2,860	22	2,882	223	25	248	3,822
	小人	632		639	946		946	128		128	1,713
	計	1,331		1,331	3,806	22	3,828	351	25	376	5,535
累計	大人	5,757	1,226	6,983	62,905	8,150	71,055	2,711	184	2,895	80,933
	小人	3,467	10,098	13,565	11,782	6,915	18,697	645	218	863	33,125
	計	9,224	11,324	20,548	74,687	15,065	89,752	3,356	402	3,758	114,058

昭和46年度特別展

区分	南方土俗展 (47.4.29～6.11) 個人	団体	計	五稜郭戦争と彰義隊展 (47.7.23～8.13) 個人	団体	計	総計
大人	3,283	166	3,449	10,831	1,365	12,196	15,645
小人	1,409	15,023	16,432	2,077	87	2,164	18,596
計	4,692	15,189	19,881	12,908	1,452	14,360	34,241

昭和47年度常設展示　(47.4.1～47.8.31)

月別	区分	本館 個人	本館 団体	本館 計	分館 個人	分館 団体	分館 計	郷土資料館 個人	郷土資料館 団体	郷土資料館 計	総計
4	大人	296	60	356	2,538	127	2,665	191	42	233	3,254
	小人	307		307	705	36	741	52	38	90	1,138
	計	603	60	663	3,243	163	3,406	243	80	323	4,392
5	大人				8,007	156	8,163	234	18	252	8,415
	小人				4,114	4,352	8,466	75		75	8,541
	計				12,121	4,508	16,629	309	18	327	16,956
6	大人	176	50	226	8,652	2,121	10,773	28	19	247	11,246
	小人	87	5,055	5,142	1,727	4,339	6,066	230	35	65	11,273
	計	263	5,105	5,368	10,379	6,460	16,839	58	54	312	22,519
7	大人	576	115	691	4,994	2,127	7,121	223	20	243	8,055
	小人	251	2,805	3,056	287	393	680	33		33	3,769
	計	827	2,920	3,747	5,281	2,520	7,801	256	20	276	11,824
8	大人	1,296	10	1,306	6,459	564	7,023	498	34	532	8,861
	小人	649	41	690	483	204	687	132	147	279	1,656
	計	1,945	51	1,996	6,942	768	7,710	630	181	811	10,517
累計		5,237	8,171	13,408	42,325	14,496	56,821	2,126	388	2,514	72,743

博物館日誌抄　46.12.4 ～ 47.8.31

46.12.4　市民講座（植物）
12　青年センター茶道教室　於杉花亭
14　箱館戦争資料の整理（分館）12月19日まで
28　御用納

47.1.4　御用始
6　美術資料の整理（本館）1月9日まで
11　箱館戦争関係資料展示会（分館）1月30日まで
12　考古資料の整理（本館）1月30日まで
18　第2回冬の公園と博物館で遊ぶ会　1月23日まで

2.5　市民講座（植物）
8　地質鉱物資料整理（分館）2月13日まで
18　埋蔵文化財対策調査概報発行
20　市民講座（美術）

3.4　市民講座（植物）
5　青年センター茶道教室　於杉花亭
8　考古資料収集　3月12日まで
14　サイベ沢遺跡事前調査　3月31日まで
16　花光コレクション目録作成

4.2　宗偏流虚心会茶会　於杉花亭
9　市民講座（考古）
15　流通センター用地発掘調査　10月末日までの予定
20　箱館戦争関係資料収集調査（青森県平館）22日まで
22　市民講座（植物）
29　特別展「南方土俗展」開催　6月11日まで
30　特別展民俗講座

5.6　科学教室（分館）昆虫採集と自然愛護
7　大日本茶道学会流茶会　於杉花亭
13　市民講座（植物）植物の観察法と春の野草
13　科学教室（分館）植物採集、自然愛護
21　市民講座（考古）於流通センター発掘場所
22　陸奥湾海洋調査実施　於青森市浅虫　5月31日まで

6.3　科学教室（分館）星座観測
8　函館付近の資料調査（分館）6月9日まで
10　博物館協議会開催（本館）
10　市民講座（植物）季節と開花
11　特別展「南方土俗展」終了
18　市民講座（考古）土器の造り方
18　科学教室（分館）昆虫観察会
26　皮舟計測を行なう（本館）
29　全道博物館大会　於苫小牧市

7.2　表千家流同門会茶会　於杉花亭
4　第2回博物館庶務主任者研修会　於東京都
7　科学教室（分館）天体観測
8　市民講座（植物）植物の採集と標本作成
9　市民講座（考古）遺跡を語る
9　科学教室（分館）植物の調べ方
23　特別展「五稜郭戦争と彰義隊展」開催　8月13日まで
28　科学教室（分館）昆虫標本の作り方

8.1　特別展「港祭り協賛郷土資料展」9月31日まで
2　科学教室（分館）植物標本の作り方
3　科学教室（分館）植物の名前の調べ方
8　馬場コレクション（民俗資料）整理　9月10日まで
10　科学教室（分館）昆虫標本の作り方
11　科学教室（分館）昆虫の名前の調べ方
13　市民講座（考古）遺跡を語る
13　磯の生物観察会（博物館友の会と共催）
13　特別展「五稜郭戦争と彰義隊展」終了
27　駒沢大学茶道部茶会　於杉花亭

Hakodate City Museum News
SARANIP—サラニップ— No.5　1972.9.1.発行
編集・発行　市立函館博物館（TEL0138-23-5480）
北海道函館市青柳町・函館公園内（〒040）